研究班紹介

第１班
生活絵引編纂共同研究

田上　繁
（非文字資料研究センター長 /総括）

Ａジョン・ボチャラリ；Ｂ小熊　誠；Ｃ鳥越　輝昭
（非文字資料研究センター研究員／研究班代表）

生活絵引編纂共同研究の下に、①『マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引』編纂共同研究を進め、21世紀 COE プログラムと本センター第１期研究事業をとおして編纂、刊行した１巻～３巻に続き、残りの４巻・５巻を完成させる。②日本近世・近代生活絵引編纂共同研究を推進し、第一期で対象とした北海道、北陸、東海道などの東日本の生活絵引の公刊をうけて、第２期では西日本の沖縄を中心とした『南島編』の編纂共同研究に着手する。③ヨーロッパ生活絵引編纂共同研究に新たに取り組み、絵引編纂という手法が東アジアのみならず、ヨーロッパにおいても有効であるか試作本を編纂して検証する。これら三つの共同研究を組織し、「絵引」という世界的に類例のない図像資料の情報化方式を推進し、絵引の編纂をとおして非文字資料研究センターが世界的な研究拠点となることを目指す。

Ａ『マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引』編纂共同研究

過去に描かれた図像から情報を引き出し、「発信する絵引」ともいうべき方式を考案した『絵巻物による日本常民生活絵引』全５巻は、刊行されて半世紀余が経過した現在もなお、日本史研究上の必須の工具書として活用されている。

私どもは、神奈川大学 21 世紀 COE プログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」（2003～2007 年度）において、同書に描かれた事物の名称（キャプション）を英語・中国語・韓国語に訳するとともに、絵引に付された解説文を英語訳し、『マルチ言語版絵引』*Multilingual Version of Pictopedia* として編集・刊行する事業に取り組んできた。このプロジェクトをとおして、日本以外にはあまり知られてこなかった「絵引」を、世界的に利用可能な図像資料にするとともに、世界に類のない「絵引」という図像の編纂・活用方式を世界に提示し、世界的な共通方式にすることを目指したのである。『マルチ言語版絵引』〈本文編〉は、『絵巻物による日本常民生活絵引』英文版としての性格を、また〈語彙編〉は、英語・日本語・中国語・韓国語の各言語から同書を読み、かつ比較対照的に利用できる資料集の役割を有する。

2008 年度に発足した非文字資料研究センターの共同研究は、『マルチ言語版絵引』全５巻のうち Vol.1/Vol.2 を世に問うた 21 世紀 COE の事業を継承するものであり、その第一期共同研究の成果として、2011 年３月に Vol.3 を刊行した。2011 年度から開始する第二期共同研究の目的は、上記３巻の編集実績を前提として、これまでと同じく若手研究者を起用し、次世代の育成を視野に入れながら、完訳版全５巻を刊行することである。

私どもは、海外の歴史学・民俗学・人類学・文学など様々な分野の研究者にとって、『マルチ言語版絵引』が日本の生活文化研究の有力な参考資料となることを期待している。同時に、本書に対する第三者の評価、全５巻の翻訳語彙の再精査と累積編集、「絵引」英語訳の電子出版など『マルチ言語版絵引』固有の課題とともに、2011 年度から開始する新たな「生活絵引」編纂グループとの共同研究の推進という課題もあり、これらの研究課題への取り組みによって、生活絵引研究の新たな局面を切り開きたい。

Ｂ『日本近世生活絵引』南島編編纂共同研究

本研究班は、近世琉球地域における風俗絵図を対象として生活絵引を合同で研究し、その編纂を進める。研究対象は、琉球列島の北部、首里・那覇、南部の３地域とし、それに対応させて「琉球嶌真景」、「琉球進貢船図屏風」と「近世琉球風俗絵図」、「八重山蔵元絵師画稿集」

を予定している。

「琉球嶌真景」は、18 世紀から 19 世紀前半にかけての『南島雑話』以前の奄美における生活習俗が描かれている。それは、11 景で構成された巻物で、製糖風景、輪踊り（八月踊り）、相撲、船こぎ競争などが描かれ、当時の奄美の生活がよくうかがえる。

「琉球進貢船図屏風」は京都大学総合博物館蔵であるが、その他に沖縄県立博物館蔵の「首里那覇港図」や滋賀大学所蔵の「琉球貿易図屏風」、浦添美術館蔵の「琉球交易港図」など数多くある。それらは、近世の那覇港の賑わいを描いているが、進貢船や薩摩船の他にもサバニなども描かれ、さらに船に乗る人々や陸にいる人々などその中で描かれた近世首里、那覇における民衆の風俗をうかがい知ることができる。また、明治以降に出された査丕烈「琉球風俗絵図」は、按司の婦子、士族の妻子、商売をする婦人、子豚を売る民、糸満の漁業民など 10 の画題について描かれている。髪型や衣服、持ち物など琉球王国末期から明治中期ころまでの沖縄の風俗を知ることができる。

さらに、「八重山蔵元絵師画稿集」から八重山の人々の生活を調べていきたい。この画稿集は、琉球王府時代に八重山の政庁であった蔵元に所属していた絵師によって描かれたもので、八重山の祭りや農作業、布の製作工程などが描かれ、114 点が残されている。描かれたのは明治中期と考えられるが、沖縄は明治 12（1879）年に琉球処分によって日本に併合された後もしばらくは旧慣温存政策がとられ、琉球処分以後に描かれたといってもそこに描かれている民衆の生活にはそれ以前の慣習が残されている。近世期の八重山の生活を知る上で、貴重な画集だと考えられる。

初年度の 2011 年度は、「八重山蔵元絵師画稿集」を取り上げる。研究班の班員と共同研究者が中心となって研究と編集作業を進めるが、石垣出身のこの絵図に詳しい方々にも参加していただいて、地元方言をきちんと押さえながら作業を進める。初年度の作業結果を基礎としながら、引き続き首里・那覇そして奄美へと北上していく予定である。

C『ヨーロッパ近代生活絵引』編纂共同研究

『ヨーロッパ近代生活絵引』班は、今期が終了する 2013 年度末に、「18 世紀ヨーロッパの生活絵引」の第 1 巻の出版を目指している。「ヨーロッパ」は、この場合、仏・独・伊・英語圏を指しており、「18 世紀」の下限は、フランス大革命以前までである。生活絵引の資料とするのは、他の班とおなじく、同時代に描かれた、実写を目指した風俗画である。ただし、〈風俗が描き込まれている絵〉という広義の風俗画も資料に含めることになるかもしれない。ヨーロッパ文化は都市を中心に発展してきたから、資料としては、基本的に都市民の生活が描かれたものを取り上げることになるだろう。資料の分析と解説にあたっては、社会史的な視角に比較文化的視角を加味することになるだろう。18 世紀については、次期にもう 1 巻を出版して計 2 巻とする計画である。

『ヨーロッパ近代生活絵引』編纂を 18 世紀から出発する理由は、（風俗画の始まり自体はそれ以前のネーデルランドであったにしても）ヨーロッパの広域で風俗画が描かれるようになったのは 18 世紀からだからである。これは、フランスのジャン＝バティスト・シャルダン、イタリアのジャンドメニコ・ティエポロ、イギリスのウィリアム・ホガースがすぐに頭に思い浮かぶ世紀である。なお、将来的には、19 世紀についての生活絵引 3 巻ほどを出版し、最後にネーデルランドに関する絵引を出版したいと思っている。

当班は、資料の蓄積のない零からの出発であるから、今年度は、（1）基本資料の収集・所在確認・選別、（2）関連資料の収集と検討、を目標としたい。

当班は、研究員として、フランス文化・文学専攻で、祝祭・スペクタクル・舞台芸術・社会思想に造詣の深い熊谷謙介氏、ドイツ語圏の美学・前衛芸術思想専攻で視覚文化に造詣の深い小松原由理氏、という新進気鋭の研究者ふたりに、比較文学・比較文化史専攻の鳥越輝昭が加わるかたちで出発する。熊谷が仏語圏、小松原が独語圏、鳥越が伊語・英語圏と全体のまとめ役を担当して、「ヨーロッパ」をカバーする計画である。